

令和6年度 学校経営報告書（自己評価）

学校番号	22	学 校 名	吉田特別支援学校	校 長 名	伊藤 聖子
------	----	-------	----------	-------	-------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
安心・安全	ア 児童生徒の命を守り、互いの人格と多様性を認め合う教育活動の推進	・教職員自らが人権感覚や道德心を高め、見本となる行動ができたと答える教職員 100%	97%	A	・各学部で実施している人権チェックは人権感覚を維持向上するのに有効だった。 ・小学部では、ありがとうカードを用いて良い行動を認め合う風土をつくった。
	イ 児童生徒が安心安全に生活できる教育環境の整備と教員の対応力向上	・児童生徒が安心安全に学校生活を送ることができるよう日常的に環境整備が行えたと答える教職員 100% ・学校経営予算の12月末執行率70%以上 ・監査、検査等の結果における注意、指摘事項の区分0件	99% 72.5% 4件	A	・毎月実施する安全点検では、点検表に基づきながら丁寧に安全管理ができた。児童生徒の動線や行動を予測して環境整備することができるようになり、職員の危機管理意識が高まった。 ・危険箇所や指導体制など、気づいた時は、学年やグループで共有し、すぐに対応することができた。 ・適切に予算執行し、教育効果の高い環境整備ができた。 ・物品検査で4件の注意事項があり、再発防止に努めた。
	ウ 事故や大規模災害等に備えた危機管理体制の強化	・事故や発災時の自らの役割を理解し、訓練では適切、迅速な行動をとれたと答える教職員 100% ・児童生徒自身が命を守る行動ができるよう、実態に応じた防災教育が実施できたと答える教職員 100%	100% 99%	A	・職員は事前に各自で危機管理マニュアルを見て自分の役割を確認した上で訓練に臨むことができた。 ・12月には防災の日を設定し、全校で非常食体験や避難所体験を行った。児童生徒は体験をとおして防災意識や知識が習得できた。 ・イラストやキーワードを用いて児童生徒の発達段階や特性に応じた防災教育を行うことができた。
	エ 働きやすい職場環境づくりと組織的な対応ができる教員集団づくり	・日常業務や分掌業務を行う上で効果的・効率的な遂行を意識した業務改善に取り組めたと	85%	B	・分掌課内でチャットグループを作り、情報共有するようにしている課があった。スピード感をもって対応することができ、会議時間が短縮できた。 ・日々の業務に追われ、効率を

様式第3号

		答える教職員 100% ・職場における良好な人間関係づくりを意識して、報連相や雑相に努めることができた と答える教職員 100%	96%		考えることまで考えられなかった職員もいるが、「やめる」、「任せる」、「創り出す」の視点で業務をと捉えなおすことができた。一方、効率ばかりを重視し、本質を見失うことがないようにしていきたい。 ・学年を超えて協力体制をとることができている。意見を言い合える環境である。
	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
授業	ア 学習指導要領を踏まえ、児童生徒の思考・判断・表現を引き出すための授業力の向上	・児童生徒が学習活動の中で、考えたり判断したりしながら力を発揮することのできる授業実践ができた と答える教職員 100%	97%	A	・教師が一方的に教え込むのではなく、児童生徒自身が解決したい課題や問いについて考えたりこれまでの経験や知識を思い出したりしながら学びを深めることができた。 ・児童生徒の思考に沿った授業展開を工夫できた。
	イ 個別の指導計画における適切な目標設定と効果的な指導実践	・実態に応じた適切な個別の指導計画が作成でき、目標達成することができた と答える教職員 100%	97%	A	・学年や学習グループで個別の指導計画に基づいて個に応じた支援方法や目標設定をすることができた。 ・実態に応じて目標を変更することもある。正確な実態把握をし、保護者と内容の共有をしながら更新していきたい。
	ウ 12年間の成長と自立を見通した各部における教育課程の見直しと改善	・自立に向け、学年段階を踏まえた上で、実態に応じた指導実践を行い、成果が出たと答える教職員 100%	98%	A	・グランドデザインに各学部及び各学年の目指す姿を掲げている。教員はその姿を意識しながら指導に当たることを共通認識でき、12年間のつながりを意識することができた。 ・検討を繰り返し、次年度は教育課程の変更を行うことになった。これまで以上に12年間のつながりを意識した学習内容が求められる。
	エ BYODを意識した、個に応じたICT活用の推進	・端末の活用方法やルールなど、個に応じた指導ができた と答える小中学部職員 100% ・卒業後の生活を見据え、情報モラルや個に応じたICTの活用方法を踏まえながら指	82% 97%	B	・職員のパソコンスキルアップ講座を実施したり各学部でICT活用事例を共有したりした。個人差があり、活用できたと自己評価する教員は少なかった。 ・高等部1年生でBYODを導入した。一部の生徒はchromebookで課題の提出やテストを行った。 ・今後も個人端末の取り扱いやルールについて整理し、卒業後の生活を豊かにするツールとな

様式第3号

		導ができたと答える高等部職員 100%			るよう、指導を充実していきたい。 ・重度重複の児童生徒に対する ICT 活用の有効性をもっと広げていきたい。
	オ 生涯教育につながる教育活動(文化・スポーツ・芸術)の充実	・児童生徒の体力の維持向上と生涯スポーツに関する授業実践や情報提供ができた と答える教職員 100% ・表現力や想像力を高めるために、読書や芸術活動(音楽・美術)に取り組める環境を整え、教育活動を推進できた と答える教職員 100%	97% 92%	B	・知的学級の多くは毎朝、周回走を行っている。毎日継続してきたことで体力が維持向上し、意欲的に運動する姿が増えた。肢体学級では自立活動を中心に姿勢保持や動作の向上することができた。 ・中学部では、パラスポーツ種目を取り入れ、スポーツへの興味を広げることができた。 ・1学期に演劇鑑賞を行い、演劇の迫力や舞台装置など本物に触れることができた。 ・お話の会や読書週間などをおして読書活動が充実した。
	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
連携	ア 地域社会とつながる教育課程の実現を目指した、コミュニティ・スクールの充実	・地域社会とつながる取組みをとおして、地域と学校のつながりをもつことができた と答える教職員 100%	95%	A	・各学部でのつながり学習の実践を校内掲示板で共有した。つながり学習の目的を再認識した上で、地域資源を積極的に活用したり地域施設の清掃活動をしたりすることができた。 ・5名のボランティア先生から、農業、漁業、太鼓など地域に関わる活動を教えていただくことができた。
	イ 自己実現を図るための自己理解とキャリア教育の充実	・児童生徒の実態や年齢に応じたキャリア教育の実践ができた と答える教職員 100% ・児童生徒自身が自己理解を深め、自己選択や自己決定を促す指導の充実が図れた と答える教職員 100%	93% 97%	B	・各学部でキャリア教育をテーマに学習会を行った。学校の教育活動全体がキャリア教育に結びついていることが共通認識できた。 ・職員施設見学、他学部交流、進路学習会などをおして次年度及び社会生活とのつながりを意識しながら指導に当たることができた。 ・今後も保護者、関係機関との連携を深め、早期から進路指導の充実を目指す。

	ウ 共生社会の実現に向けた地域・学校・家庭との連携強化	・必要に応じて地域の関係機関や保護者と連携して課題解決に取り組めたと答える教職員 100% ・交流教育や地域作業など、地域とつながる学習を積極的に取り入れ、学校と地域のつながりをもつことができたと回答する教職員 100%	97% 93%	B	・学校は保護者と直接話をすることを大切にしてきたことにより信頼を得ることができた。外部機関とはコーディネーターを窓口にもまめに情報共有し、迅速に対応することができた。 ・高等部では毎週地域作業を行った。地域施設の清掃や草取りなどをおして生活経験を広げるとともに障害者に対する理解を促すきっかけになった。 ・学校間交流は各学年 1 ～ 2 回実施 ・交流籍を活用した交流及び共同学習は小学部 15 校 41 人、中学部 6 校 17 人実施 ・今後、高等部では同世代との交流教育を広げていきたい。
--	------------------------------------	--	-----------------------	----------	--